

大鳥井山遺跡 縄文時代の概要

横手市教育委員会 澤 谷 敬

目 次

- I 大鳥井山遺跡 縄文時代の概要 (P1~4)
シンポジウムの報告内容の要約と図表
 - II 大鳥井山遺跡の由緒 (P5~7)
概報や報告書に記載されている地名・遺跡名・調査前の状況などの抄録
 - III 先史時代の移り変わりと大鳥井山遺跡 (P8~15)
『横手市史 通史編 原始・古代・中世』(2008)をもとに先史時代を概観
 - IV 【資料紹介】大鳥井山遺跡の出土遺物が物語る広域交流 (P16)
原産地が遠方の石材で作られた石器など 4 点を紹介
 - V 横手盆地の遺跡から出土した縄文土器の移り変わり (P17~27)
『横手市史 通史編 原始・古代・中世』(2008)をもとにした土器編年図
-

I 大鳥井山遺跡 縄文時代の概要

1. 大鳥井山遺跡が営まれた時代と発掘調査

大鳥井山遺跡は、後三年合戦のころの平安時代のほかにも、さまざまな時代の人びとがそこで生活を営んだ痕跡が残されている複合遺跡です。発掘調査で遺構や遺物の出土量がもっとも多かったのが縄文時代で、それに前後する旧石器時代と弥生時代の石器や土器、また新しい時代の中世や近世の遺構や遺物も出土しています。

これまで 11 次にわたる発掘調査の成果により、平安時代の居館跡としては、2010 年に国の史跡指定として評価されました。しかしながら、縄文時代の遺跡については整理作業が道半ばの状況です。

こうしたなか、『横手市史』の刊行、雄物川郷土資料館での出土遺物の展示、線刻のある石製品 63 点の市文化財指定など、断片的ではありますが、縄文時代の調査成果の公表や公開も行われています。

2. 大鳥井山遺跡の旧石器時代・縄文時代・弥生時代

大鳥井山遺跡では、平安時代よりも古い時代の遺構が 300 基以上、遺物が 200 コンテナ 200 箱以上出土しており、その多くは縄文時代の中期から後期のものです。

そのほかの時代の遺物では、旧石器時代の刃こぼれと思われる使用痕がある石刃が 1 点、縄文時代草創期の柄に装着し投槍に使われたと思われる有茎尖頭器が 1 点、早期・前期の土器片、弥生時代の土器片が出土しました。現在のところ、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・前期、弥生時代では、その時代の遺構は確認されていません。

3. 大鳥井山遺跡の縄文ムラ

縄文時代の遺構や遺物の出土場所は、小吉山北部地区では現在テニスコートや管理棟がある西側の台地に、大鳥井山西部地区では大鳥井山神社が鎮座する台地に、それぞれ集中しています。

小吉山北部地区の台地では、堅穴住居跡3軒、石囲炉7基、土器埋設遺構27基、食料貯蔵庫と考えられるフラスコ状土坑4基、土坑250基以上が、台地の中央部を囲んでドーナツ状に並んでいました。この内、石囲炉や土器埋設遺構など、遺構の形態や焼土が埋まっていたりする状況から、堅穴住居跡の屋内炉の可能性のある遺構が30基以上あります。このため、多くの堅穴住居跡があったことが推測されますが、炉の形態や遺構から出土した土器に時期差があることや、互いに近接したり重複したりしており、同時期に建っていた堅穴住居は多くとも数軒程度と考えられます。

大鳥井山西部地区の台地では、縄文時代中期後葉の堅穴住居跡3軒とフラスコ状土坑3基が、台地の縁辺部に弧を描いて並んでいました。

これまでのところ、小吉山北部地区の台地は、中央の広場を囲んで数軒の堅穴住居が並ぶムラが、縄文時代中期中葉から、あるいは遺構は未確認ではあるものの前期後葉から、後期前葉までの長い期間に断続しながら営まれた集落跡であったと考えられます。また、大鳥井山西部地区の台地は、堅穴住居1、2軒程度のムラが、縄文時代中期後葉から末葉に営まれた小規模な集落跡であったと考えられます。

大鳥井山遺跡発掘調査一覧

調査次	調査年	調査地区		調査面積	縄文時代	
		小吉山	大鳥井山		検出遺構	出土遺物
第1次	1977	東部	東部	5,923m	堅穴住居跡	縄文土器・石器
第2次	1978	東部		13,647m		石器・石製品
第3次	1979	南部	東部	1,935m		石器
第4次	1980	南部		17,285m		石器
第5次	1981	北部		428m		縄文土器・石器
第6次	1982	北部		5,500m	堅穴住居跡など	縄文土器・石器など
第7次	1983	北部		5,800m	土坑など	縄文土器・石器など
第8次	2007		東部	91m	—	石器
第9次	2008		西部	496m	堅穴住居跡など	縄文土器・石器
第10次	2008		東部	61m	—	—
第11次	2009	西部		231m	土坑	縄文土器
			計	51,397m		

大鳥井山遺跡第6・7次調査出土石器・石製品一覧

石器・石製品 集計表	遺構内出土		遺構外出土		計
	完形品	欠損品	完形品	欠損品	
石鏃	12	2	56	17	87
石槍	1	0	25	23	49
石錘	2	0	9	0	11
磨製石斧	0	5	8	49	62
石鏃	0	0	23	8	31
掻器	6	1	25	7	39
石鏃	1	3	4	9	17
石匙	2	0	17	14	33
砥石	0	0	1	1	2
石皿	0	3	0	9	12
磨石	3	1	9	18	31
凹石	11	26	76	77	190
擦痕のある石	2	0	3	4	9
面取石(柱状節理)	8	2	89	63	162
円盤状石器	9	3	74	16	102
石棒・石剣類	0	1	1	6	8
小形磨製石斧	1	1	9	7	18
穿孔のある石	12	2	56	15	85
化石	1	0	7	8	16
線刻のある石	6	5	27	25	63
▲状石製品	13	4	21	12	50
岩偶	0	0	0	1	1
垂飾具カ	1	0	0	0	1
腕輪カ	0	1	0	2	3
石製品	1	1		4	6
計	92	61	540	395	1,088
		153		935	

大鳥井山遺跡検出遺構一覧(第1次~11次調査)

遺構名	略記号	縄文時代	時期不明	平安時代	計
堅穴建物跡	SI	6	2	2	10
揺立柱建物跡	SB			16	16
柵列跡・柱穴列跡	SA			12	12
土壘跡	SF		1	4	5
堀跡・大溝跡・溝跡	SD		23	10	33
土橋跡・通路跡	SM			1	1
土坑	SK	252	90	67	409
フラスコ状土坑	SKF	7			7
土器埋設遺構	SR	29			29
性格不明遺構	SX		2	4	6
計		294	118	116	528

(柱穴と再検前後の揺立柱建物跡を除く；2022年3月現在)

4. 大鳥井山遺跡の名称について

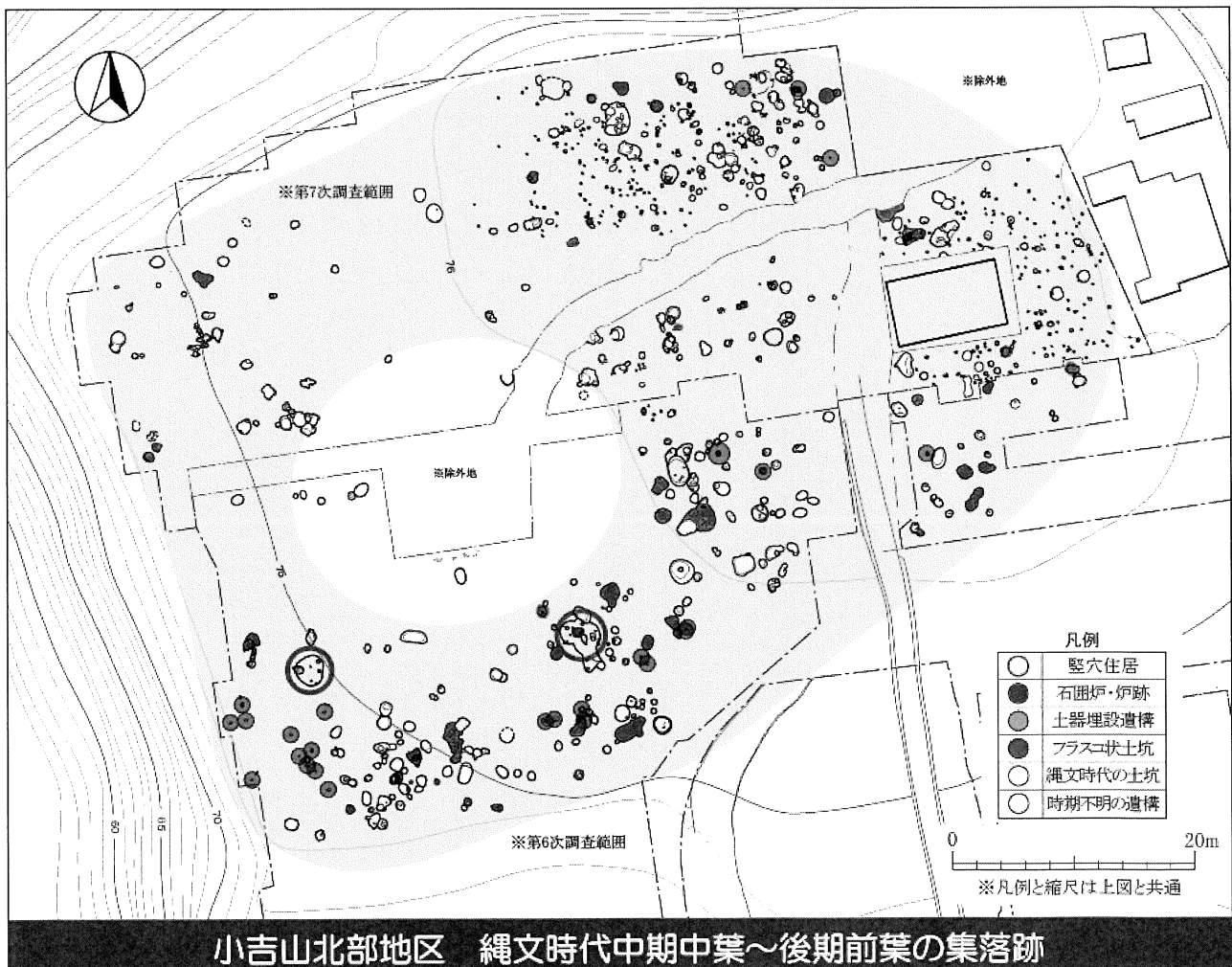
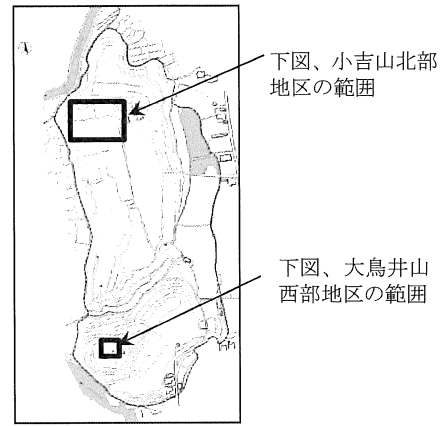
遺跡名は、文化財保護法に基づき、時代や種別、主な遺構や遺物、参考文献とともに、遺跡番号を付して、都道府県ごとの遺跡地図に位置と範囲が登録されています。また、遺跡の登録や変更も、法に基づいた手続きが必要となります。

大鳥井山遺跡一帯で登録されている5つの遺跡は、国指定史跡大鳥井山遺跡の範囲にすべて含まれています。同じ場所に複数あるのは、遺跡の時代や種類を明確にするという意図ですが、混乱を招いている状況もあります。

縄文時代では小吉山遺跡と大鳥井山遺跡が登録されていますが、範囲は大鳥井山遺跡の一部が小吉山遺跡で、現在の遺跡地区割りで小吉山北部地区にあたります。

『横手市史』では旧石器時代や縄文時代について小吉山遺跡として紹介されていますが、その後の調査で、大鳥井山西部地区などでも遺構や遺物が出土しています。

このため、縄文時代について、遺跡登録の変更手続きが必要な状況にありますが、ここでは一括して大鳥井山遺跡として取り扱うこととします。

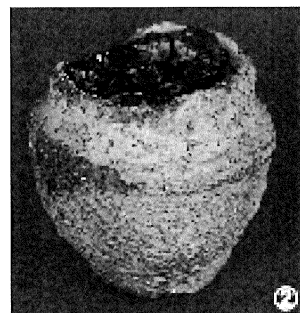


大鳥井山遺跡 旧石器時代・縄文時代 略年表

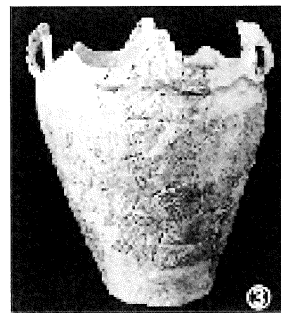
時代・時期区分		横手盆地の土器編年 土器様式 土器型式		大鳥井山遺跡の主な遺物				遺構
旧石器時代 約35,000年前～								未確認
草創期 約13,000年前～	出現期土器群 隆起縄文系土器群 爪形文系土器群 押圧縄文土器群 多羅文系土器群							
早期 約10,000年前～	隆起文系土器群 押圧文系土器群 沈線文系土器群							
縄文時代	前期 約6,000年前～	前期大木	(上川名)大木 1					未確認
			大木2a					
			大木2b					
			大木 3					
			大木 4					
			大木 5					
	中期 約5,000年前～	中期大木	大木6					
			大木7a					
			大木7b					
			大木8a					
後期 約4,000年前～	東北の土器群	(大木10系統) 門前 (宮戸Ib) (縄取) (宝ヶ峰)					石囲炉・土坑 竪穴住居跡	
		壺付土器群						
晩期 約3,200年前～ 約2,400年前	壺ヶ岡	大洞B, BC, C1, C2, AA'	未確認				土器埋設炉 土坑	



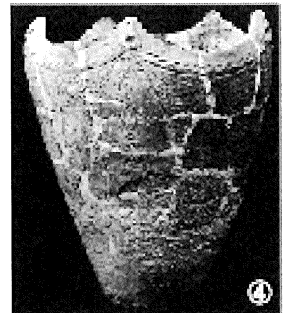
①



②



③



④

Ⅱ 大鳥井山遺跡の由緒

～ 概報や報告書に記載されている地名・遺跡名・調査前の状況などの抄録 ～

1. 大鳥井山の地名について

現在の遺跡所在地は大鳥町ですが、2009年発行の『大鳥井山遺跡第9～11次調査報告書』で地名の古記録や由来をまとめています。

大鳥井山は、寛文十二年(1672)作成の『横手城下絵図』に記載されている「おとり山」や現存する最古の記録です。一方、小吉山は、菅江真澄の『雪の出羽路』(文政七～九年(1824～26)成立)に記載されている「小吉山大明神社」が最初となります。

「地理的存在としての大鳥井山」 『大鳥井山遺跡—第9次・第10次・第11次調査—』(2009)より

大鳥井山は、これまで「大鳥山」「大鳥居山」「おとり山」「おどり山」など様々な名称で呼ばれてきた。寛文十二年(1672)作成の『横手城下絵図』に「おとり山」と記載されているのが、現存するもっとも古い記録である。享保十三年(1728)、久保田藩家老今宮大学義透が横手城代戸村十太夫義見に命じられて作らせた『横手絵図』に「大鳥山」と記載されているのがこれに次ぐ。同絵図では大鳥井山の山頂部に観音堂が立地しているが、この堂宇は延宝七年(1679)の創建と伝わり、現在大鳥井山の山頂部に鎮座している大鳥井山神社社殿は、この建物の焼亡後に再建されたものである。

地名の由来については、『六郡郡邑記』(秋田藩士岡見知愛による地誌、享保十五年(1730)成立)においては当遺跡から西方7.5kmの御嶽岳山頂に鎮座する塩湯彦神社の鳥居があったことを由来としている。塩湯彦神社は出羽に9座存在する式内社のひとつであり、中世にいったん衰微した後、近世に入って佐竹氏により復興されている。一方、菅江真澄『雪の出羽路』(文政七～九年(1824～26)成立)「熊野三社並鳴見沢由来」では、「熊野ノ宮の一ノ鳥居建し処」であったことが「大鳥居山」の由来であるとしている。現在の熊野神社は当遺跡から東方500mの丘陵上に立地するが、何度か社殿を移転しており、江戸中期までは当遺跡を見下ろす東方2kmの山上に鎮座していた。「熊野三社並鳴見沢由来」をはじめとする諸縁起には、熊野神社の別当である明江山遍照院(みょうえさんへんじょういん)が戦国期以前には36坊を擁する大寺院であったと記されている。

大鳥井山遺跡の北部を構成する小吉山については、『雪の出羽路』平鹿郡十二に「小吉山大明神社」の記述があるのが初見である。

2. 遺跡の名称について

先にも触れましたが(I-4)、大鳥井山遺跡一帯で登録されている遺跡は次の5箇所ですが、遺跡の範囲では大鳥井山遺跡にすべて含まれています。遺跡名も、最初に登録された昭和38年(1963)の遺跡地図以降、紆余曲折があり、平安時代の居館跡については2010年の国の史跡指定に先立って大鳥井山遺跡として整理されています。

- ・(遺跡番号) 203-03-64 (遺跡名) 大鳥井山遺跡
- ・(遺跡番号) 203-03-65 (遺跡名) 小吉山遺跡
- ・(遺跡番号) 203-03-66 (遺跡名) 小吉山塚群
- ・(遺跡番号) 203-03-67 (遺跡名) 小吉山火葬墓
- ・(遺跡番号) 203-03-68 (遺跡名) 大鳥井山十三塚

これまでも遺跡の時代や性格、範囲については、旧羽州街道を挟んで東に隣接する台所館遺跡も含め検討されていますが、これからも調査や研究の成果を踏まえ、検討し整理する必要があります。

「遺跡名称について」 『大鳥井山遺跡－第9次・第10次・第11次調査－』(2009)より

当遺跡が文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として登録されたのは、昭和38年(1963)秋田県教育委員会が編集した『秋田県遺跡地名表』に「大鳥井」と記載され、城跡に分類されたのが最初である。昭和52年(1977)から行われた公園造成に伴う発掘調査においても、秋田県遺跡地名表に準じて「大鳥井山遺跡」との名称を採用している。

しかし、昭和51年(1976)に作成された『秋田県遺跡地図』には「大鳥井柵(跡)」と記載されており、名称に新たに「柵」が付け加えられた。『陸奥話記』(11世紀後半成立か)をはじめとする近世以前の文献及び戦前までの研究等には「大鳥井柵」という表記は登場しない。当遺跡が『陸奥話記』に記載されている清原氏当主の子の居住地である大鳥山に比定されていることから、『陸奥話記』や『後三年合戦絵詞』(貞和三年(1347)成立)において軍事的な拠点の呼称として用いられる「柵」を当てはめて、「大鳥柵」あるいは「大戸井柵」と呼ぶことが戦後になって散見されるようになる(伊藤鉄太郎『土器と城郭』1973等)ため、それが採用されたと考えられる。その後、遺跡の名称としては一貫して「大鳥井柵跡」とされ、今日に至っている。

今回報告では、「大鳥井柵」という呼称が近年成立したものであり、『陸奥話記』等の史料には登場しないこと等を踏まえ、遺跡名称を地名から採用した「大鳥井山」に復することにしたい。

3. 発掘調査前の状況について

1978年に発行された『大鳥山遺跡第1次調査概報』には、土地所有者や近隣住民などから聞き取りした内容や、発掘調査前の現況から推測される地形と遺構の状況などが記載されています。

それによると、古くから縄文時代や古代の遺物が採集されていたこと、火葬墓がある尾根状の小吉山西部地区と大鳥井山神社が鎮座する大鳥井山西部地区を除き、多くは耕作地として利用されていたこと、明治初期の地引切絵図や1948年の航空写真でも明らかのように小吉山東部地区の東側は湿地帯でかつて溜池があったこと、当時の小路が古くからの区画を反映している可能性があること、丘陵上に湧水地点が推測されること、大鳥山東部地区の東側では果樹園造成の際に土塁を削り堀を埋めたこと、横手川は自然の流路変更や慶長八年(1603)の横手川付け替え前は、丘陵直下を流れていた可能性があること、雨水の浸透状況から堀の所在が推測できることなどが記載されています。

『大鳥井山 I』(1978)より

- ・古来より表面採集された縄文・土師・須恵器などの遺物は、三浦俊一、石井正一郎らの努力によって、現在、横手市立図書館に保管されているが、その総合的な論考、考証は皆無であった。(P1)
- ・小西宅をはさんだ5Hおよび5I大グリッドは、いわゆる谷地で粘土性に富む土質が厚く層をなしており(P6)、付近の家人の話では、深い沢地を埋め立てした後、水田、牧草、宅地に再三利用した地域であるとの助言を得た。(P7)
- ・東側は緩斜面をなし昭和45年(1970)頃まで湿泥な水田と溜池の土地利用がなされていたが、現在は萱場となっており、中央平坦地との比高は約8m強となっている。((7)P8)
- ・丘陵西側崖部底部より約30mの距離をもつ範囲内には、水田、畑、果樹の地目が認められているが、これらは横手川による沖積地および氾濫原による砂礫段丘で、古くは当河川の流れはもっと丘陵に近い地点を北流していたものと考えられる。(P8)
- ・12D,13D大グリッド内に認められる70mの等高線の流れが、ほぼ直角に東側に折れ、20~30mの長さ、

幅 20m 前後に入り込んでいる地域には、シダ植物が他地域よりも異常に繁茂しており、いわゆる丘陵上における湧水地点と考えられる。(P8)

・丘陵には、北側の豚舎(田中宅)へ通じる道路(幅 1.5m)が南東と北東方向から各 1 本ずつ、真東より丘陵中央平坦地に真直ぐ登れる小道が 1 本通っている。一方、大鳥神社の占地する丘陵には、神社道路が南より迂曲しながら上る参道 1 本、小吉山との中間に東西に走る道路(幅 2~3m)の 1 本があり、特に後者のそれは、今回の調査地域の丘陵と分離するがごとの様相を呈している。(P10)

・《3》「西方麓は横手川に洗われているが、慶長のはじめまでは、横手川龍昌院の下を流れて台所館、大鳥井山の南端をめぐる急に折れて今見るが如く小吉山に沿って北方に走ったようで」『横手郷土史』第 29 号 P12(P10)

・《4》昭和 10~12 年(1935~37)にかけて南東一帯の土塁をけずり空堀を埋め、平坦地としてリンゴ栽培をおこなったとの高本鉄之助よりのご教示による。(P10)

・調査範囲内での土層は、多少の差異があるものの 11~13G 大グリッドは褐色腐食土層(表土 20~25 cm)→褐色土層(10~20 cm)→黄褐色土層(10 cm)→ローム層の層位をなすのが一般的である。しかし、11~13F 大グリッドの西側になるに従い、1,2 層は各々 40~60 cm と層厚となり、しかもローム層上面は、黄色の度合いが濃くなり、いわゆるソフトロームとなっているのが特色である。(P12)

・SC 遺構(空堀)の基底部の土質は、礫層の中位を利用しているため、調査期間中に降った雨も浸透性が強く、まったくたまらない点は、いわゆる空堀を裏付ける証明となるであろう。(P13)

遺跡名の変遷

遺跡番号 203-03-	遺跡名	『大鳥井山遺跡第9~11次調査』2009	『秋田県遺跡地図』(平鹿地区版) 2008	『秋田県遺跡地図』(県南版) 1987	『秋田県横手市遺跡詳細分布調査報告書』1986	『秋田県遺跡地図』1976		『秋田県遺跡地名表』1963		『埋蔵文化財包蔵地調査カード』1962				
62	台処館跡	台処館跡	台処館跡	台処館跡	台処館跡	81	台処館	大鳥井柵に含まれる	80	台処館 I	縄文遺物包含地			
63	台所館遺跡		台所館遺跡	台所館遺跡	台所館遺跡	80	台処館					80	台処館	
64	大鳥井山遺跡	大鳥井山遺跡	大鳥井柵跡	大鳥井柵跡(大鳥井山)	大鳥井柵跡	76	大鳥井柵		76	大鳥井	城塞遺跡チャシ	76	大鳥井柵	
65	小吉山遺跡								77	大鳥井山 II	土師須恵包含地	77	大鳥井山	
			小吉山遺跡	小吉山遺跡	小吉山遺跡	旧,小吉山 I II	78	小吉山 I		78	小吉山 I	縄文遺物包含地	78	小吉山 I
							79	小吉山 II		79	小吉山 II	土師須恵包含地	79	小吉山 II
66	小吉山塚群	小吉山塚群	小吉山塚群	小吉山塚群	小吉山塚群									
67	小吉山火葬墓	小吉山火葬墓	小吉山火葬墓	小吉山火葬墓	小吉山火葬墓		旧,小吉山 I							
68	大鳥井山十三塚	大鳥井山十三塚	大鳥井山十三塚	大鳥井山十三塚	大鳥井山十三塚									

Ⅲ 先史時代の移り変わりと大鳥井山遺跡

～『横手市史 通史編 原始・古代・中世』をもとに、大鳥山遺跡の先史時代を通観します～

1. 人類の誕生と歴史区分

人類の祖先とされる猿人は、600 万年ほど前にアフリカ大陸で誕生したといわれています。その後、200 万年前ころに現れた原人は道具を使用するようになり、やがてネアンデルタール人などの旧人へと進化し、20 万年前ころにはフランスのラスコー洞窟の壁画で知られるクロマニヨン人など、わたしたち現生人類である新人が現れます。人類は、その長い時間のなかで世界各地へ移住・拡散していったと考えられています。

世界史では、200 万年前から 1 万 3000 年前ころまでの、原人・旧人・新人が残した石器や遺跡の時代を旧石器時代とし、前期・中期・後期の 3 期に区分しています。この時代は地質時代区分の更新世にほぼ相当する、いわゆる氷河時代です。日本では、前期・中期旧石器時代の様相については不確定ですが、3 万 5000 年前ころからの遺跡は各地で確認されており、日本史では世界史でいう後期旧石器時代を旧石器時代として区分しています。

また、文字の使用をもとにした歴史区分では、文字が登場する以前を先史時代、以後を歴史時代、その中間の文字の普及が低調な時代を原史時代といい、旧石器時代や縄文時代は先史時代にあたります。

先史時代では、歴史を解明する方法が、文字で記された史料も残る歴史時代と大きく異なります。それは、遺跡の発掘調査とそこで発見される遺構と遺物が、その時代と地域の社会や文化を解明する、ほぼ唯一の手掛かりであるということです。

2. 縄文という時代

縄文時代は、土器を作るようになり、その表面の多くには文字どおり縄目の文様が施されている時代をいいます。1 万 3000 年前ころから 2400 年前ころまでのおよそ 1 万年に及び、文化の内容は異なりますが、世界史の新石器時代に相当します。その 1 万年間は、土器の文様や形態、そのほかの遺物や遺構のようす、遺跡の様相などから、草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の 6 期に細分されています。また、日本や中国での発掘調査結果から、縄文文化をはじめ東アジア一帯が世界で最も早く始まった土器文化であると考えられています。

大鳥井山遺跡では、縄文時代を通じて遺物が出土しています。このなかで、草創期・早期と前期は遺物の出土のみですが、中期から後期では多くの土器や石器とともに、竪穴住居跡や土坑などの遺構も見つかり、大鳥井山神社が鎮座する高台や小吉山北部の高台といった、見晴らしがよく広く平らな場所を選んで暮らしていたことが分かりました。

3. 旧石器時代(約 3 万 5000 年前～1 万 3000 年前)

日本列島の人類は、氷河期に陸橋で地続きだったユーラシア大陸から、ナウマンゾウやオオツノジカ、マンモスやヘラジカなどの獲物を追って来たのが最初と考えられています。なお、最近の研究では、舟で渡ってきた可能性も考えられています。

旧石器人は、2 年以上におよぶ長い間、石で道具を作り、季節ごとに移動する動物

を追って、狩猟を中心とした遊動生活を送っていたものと考えられています。気候は氷河期が完全に終わっておらず現在より寒冷で、東北一帯には亜寒帯性針葉樹林が広がっていたようです。

横手盆地では 27 遺跡と少なく、石器も大半が地表面や切り通しなどで採集したもので、これまで発掘調査が行われた遺跡はありません。

大鳥井山遺跡では、縄文時代の土坑の埋め土に紛れ込んで、石器が一点出土しました。堅い頁岩を打ち欠いて作った石刃で、縁の両側には使ったときの刃こぼれがあります。

旧羽州街道を挟んで東に隣接する台所館遺跡では、現在は公文書館となっている旧鳳中学校の校舎建設に際し発掘調査が行われています。土層観察のため掘った試掘坑で、地山面の 40 cm 下から頁岩製の石刃が一点出土しています。この石器は、黄褐色粘土の地山層から出土した、横手市で唯一の石器です。

4. 縄文時代

土器の登場は、確保が不安定な動物性食材だけでなく、種類も多く比較的安定して確保できる植物性食材も煮炊きする食生活をもたらしました。

これにはクリやドングリといった木の実の成る落葉広葉樹林の広がりなど、気候の温暖化による環境の変化も影響し、やがて定住へとつながって、集落を営むようになります。そして、土器の形態や文様をはじめ、地域性もみられるようになります。

縄文土器は、時期や地域によって文様や形などに特徴があります。土器の編年はそれをまとめたもので、縄文時代をひもとくときの物差しとなっています。

狩猟は、旧石器時代の大型獣が姿を消し、ニホンジカやイノシシなどが獲物となりました。また、漁労も盛んになっていきます。そして、それらの俊敏な獲物を捕らえるため、弓矢や銚・釣針などの狩猟具が登場してきます。

一方で、土偶や石棒といった一見するところ実用品とは思えない“第二の道具”が作られるようになって、祈りや祭り、儀式や葬礼といった豊かな精神生活が広がり、お墓や遺物には縄文人に共通した死生観までもが反映されるようになっていきます。

こうして、縄文人は 1 万年以上の間、環境に変化に適応しながら、狩猟採集中心の社会を維持しています。

1) 草創期(約 1 万 3000 年前～1 万年前)

まだ氷河期が終りきっておらず寒冷な気候で、食料確保もどちらかといえば植物採集よりも狩猟が中心ですが、日本の一部では竪穴住居も建てられ始めたころです。いわば、旧石器時代から縄文時代への長い過渡期にあたります。

この時期の土器は、縄文時代を通じて作られるバケツのような深鉢形土器で、底部は先の尖った尖底や丸底が多く、一時期に平底もみられます。

横手盆地で確認されているのは 4 遺跡と少ないですが、河川合流点の段丘上に立地する山内地域の岩瀬遺跡では、日本最古級の石匙をはじめとする多くの石器や土器と、石器製作跡や火を焚いた炉跡がいくつも見つかりました。近くで頁岩など良質な石材が採取できるこの場所は、続く早期から晩期まで縄文時代を通じて、石材調達と石器製作の場所として折々に使われていました。なお、石匙は形から便宜的に名付けられた名称で、用途はつまみ部分に紐を結わえて使う携帯用万能ナイフと考えられています。

大鳥井山遺跡では、草創期と考えられる石器が1点、台地南東部の地山面で見つかりました。長さ8.1 cm、最大幅1.3 cm、厚さ0.6 cm、押圧剥離技法により細身でていねい作られた頁岩製の有舌尖頭器で、柄に装着して獲物を捕る投槍に使われたと思われます。

2) 早期(約1万年前～6000年前)

日本では気候の温暖化とともに定住が進み、集落が形成されるようになります。また、土器の特徴から、日本のなかでいくつかのまとまり、広範な地域文化圏も現れてきます。この時期、ユーラシア大陸の一部では穀物栽培が始まっています。

温暖化は6000年前ころがピークで、年間平均気温が現在よりも1～2度高かったといわれます。これにより海水面が上昇し、海岸線が内陸部に入り込んでいました。この時期の貝塚が現在の海岸線から奥まった所にあるのもこのためです。そして、この後の前期まで続くこの現象は、縄文海進と呼ばれています。

土器は尖底や丸底の深鉢形土器で、塗料や接着剤として漆の使用もはじまっています。

この時期も横手盆地では6遺跡と少ないですが、湯沢市の国指定史跡・岩井堂洞窟では、幾層もの堆積層からそれぞれ早期から古代までの土器が出土しました。とりわけ早期では、量は多くないもののはじめころから終わりころまでの土器や石器と、火を焚いた焼土跡も見つかりました。この洞窟は、規模や遺物の量から、早期を通じて多くても2家族ほどが頻繁に入れ替わりながら、南北に行き交う折に短期間滞在したシェルターとして機能していたものと考えられています。

大鳥井山遺跡では、平安時代の地業で残った小吉山台地縁辺部の自然堆積層(縄文時代遺物包含層)から、尖底土器の底部が1点出土しました。また、大鳥井山神社のある大鳥井山の台地からは、外面に撚糸文、内面に条痕文が施された土器が出土しました。しかし、いずれも土器片のみで、生活の痕跡である遺構はまだ見つかっておらず、当時の遺跡のようすは分かっていません。

3) 前期(約6000年～5000年前)

温暖化が続いていたこの時期の遺跡は、縄文海進の影響による頻繁な河川の流路変更で不安定な沖積地を避け、丘陵や台地の上に展開しています。日本全体では遺跡の数が増え、比較的長い期間定住する集落や、長さ十数メートル以上の大型住居があって周囲の小集落の拠点となる集落も現れるこの時期は、人口の密集と集落の拡大期といえます。これにより、土器の地方色が顕著になる一方で、石器の良質な材料の黒曜石や接着剤として用いられる天然アスファルト、装飾具などに加工されるヒスイといった産地の限られる材料や加工品が、列島規模で流通するようになります。

深鉢形土器は、当初丸底が少し残りますが、すべて平底になります。一方で、形状はバラエティに富み、文様の装飾性も強くなって、波状口縁や立体的な把手を付けた口縁も見られるようになります。また、器形も、器高の低い鉢形土器や浅鉢形土器がわずかですが作られるようになります。

土器の地域性は次第に顕著になり、同じ流儀で作られた土器の分布範囲が、一つの土器様式の文化圏として捉えられるようになります。横手盆地はおおむね前期大木土器様式、田沢湖付近以北は円筒下層土器様式に含まれますが、境界は緩やかで双方の遺跡で互いの土器や両方の土器作りの流儀を合わせ持った土器もみられます。この土器文化圏

は中期・後期と引き継がれ、縄文時代以降でも文化の境界域として認められることがあります。

土器様式は縄文時代通じて全国で 70 ほどが登場し、一つの土器様式はその文化圏で比較的長い期間を通じて、同じ流儀で作られる土器群として捉えられます。また、縄文土器は同じ土器様式のなかでも時間とともに変化していき、地域差もみられます。土器型式はその変化の特徴を一つずつの段階として整理したもので、一つの土器様式は複数の土器型式の時系列で構成されます。土器編年は、土器様式と土器型式の移り変わりや分布範囲をまとめたもので、縄文時代をひもとく物差しとなるものです。発掘調査では、出土した縄文土器をその編年と照らし合わせて、地域性や時期を推定する作業が重要となります。そして、遺跡調査の基本となる土器の編年作業は、現在も続けられています。

横手盆地で確認されている遺跡は 35 個所と増加します。発掘調査された遺跡も増えてきますが、前期の前半の様子はまだよく分かっていません。後半になると、山内地域の小田Ⅴ遺跡など、竪穴住居跡が数軒の小規模な集落跡が確認されています。なかには、こうした衛星集落とも呼べるような集落の中核となる大規模集落が長期間にわたり営まれた遺跡もあります。大仙市の上ノ山Ⅱ遺跡では、台地の上に中央の広場を囲んで、直径4mの円形や長軸5～6mの楕円形の竪穴住居跡39軒や、長方形大型住居跡33軒、フラスコ状土坑(食料貯蔵穴)35基などが見つかりました。最大で長軸30.2m、短軸8.3m、内部に8基の炉跡もある大型住居跡ですが、互いに重複しているものもあり、同時に建っていたのは数軒程度だと考えられます。それにしても大規模な集落であったことは間違いなく、こうした大型住居があり、台地にドーナツ状に住居が並び、その周辺に食料の貯蔵穴があるような、環状集落が現れてくるのも特徴です。

大型住居跡は、集会所や共同作業場といった公共的な施設として機能していたものと考えられていました。その後、東日本で発見例が増えていくなかで、大型住居跡だけの集落跡も見つかるようになりました。また、大型住居跡内では複数の炉跡とその間の間仕切りが確認され、住居跡の内外では複数の食料貯蔵穴が確認されることが多いようです。こうしたことから、大型住居跡はやはり居住施設で、複数家族の共同住宅などとして使われたとする考え方が有力となってきました。

大鳥井山遺跡では、前期初頭ころの可能性のある丸底の深鉢形土器の底辺部、前期中ごろ(大木4,5式)や終わりごろ(大木6式)の土器片が出土しています。この時期の確実な遺構は確認できていませんが、平場に小規模な集落が営まれていた可能性があります。

4) 中期(約5000年前～4000年前)

この時期の前半は比較的温暖な気候が続きます。遺跡は低い場所でも確認されますが、多くは前期と同様な状況が継続しており、集落の維持期といえます。中ごろには、寒冷化がはじまり、海岸線が後退し、東北では落葉広葉樹林帯が広がっていたと考えられます。このため、河川の流路変動も落ち着いて、山裾や沖積地に点在する微高地にも遺跡がみられるようになり、遺跡数も増加します。同時に、遺跡の小規模化がはじまり、集落が分散していったものと考えられています。

中期の土器は、おおむね前期からの土器様式を継承しており、そのなかでデザインや形状が変化していきます。東北地方では、後半になると大木土器様式が次第に北部へと分布域を広げていきます。

土製品や石製品は、土器や石器と同じ方法で作られながら、土偶などのように形状からでは用途が想定できない遺物で、中期にはそうした遺物の増加や出現がみられます。このため、生活用具や利器としての土器や石器を第一の道具、土製品や石製品を第二の道具として区別しています。現在のお守りなども第二の道具にあたりますが、縄文時代では種類も数も豊富です。機能や使い方は縄文人と同じ世界観をもってなければ容易に理解できませんが、祭りや儀式や祈りに用いるモノ、あるいは身に付けることでその人の集団内での役割や地位を象徴するようなモノ(威信財)としての機能などが想定されています。なお、第一の道具のなかにも、機能に影響があるような装飾や形状の土器や石器、きれいな石材で使った痕のない石器、極端に大きかったり小さかったりする石器など、第二の道具の要素がみられる遺物もあります。

中期大木土器様式の竪穴住居跡では、中期後半になると、掘った窪みに扁平な河原石をていねいに組んだ石囲炉や、深鉢形土器を埋めた土器埋設炉などの屋内炉が造られます。そして末期には、土器埋設炉と石組炉と前庭部が連なった複式炉へと発展します。

このころ以降の世界は、四大文明、そして都市や国家が築かれる時代へと続きます。

横手盆地では 93 遺跡とさらに増加します。中期前半では、前期の終わりから続く雄物川地区の根羽子沢遺跡や横手地区の堀ノ内遺跡のように長方形大型住居跡もある集落跡と、横手地区の中杉沢 A 遺跡のように楕円形や円形などの竪穴住居跡が並ぶ集落跡がみられます。中期後半は縄文時代の横手盆地で最も多く集落跡が確認されている時期で、遺跡の立地は台地上と沖積地上との二分化がさらに進んでいます。山裾のテラス状になった緩斜面に立地する山内地区の上谷地遺跡では、竪穴住居跡のほかに、掘り込みのない掘立柱建物跡が見つっています。これは、建て方の技術や集落のようすが、前期からの長方形大型住居や環状集落の伝統を引き継いでいるものと考えられています。

大鳥井山遺跡の小吉山と大鳥井山の台地では、中期のころから後期の前半にかけて、断続して集落が営まれていたようです。発掘調査では、竪穴住居跡などの遺構が 300 基以上、遺物も 200 コンテナでおよそ 200 箱分が見つかり、この時期の横手盆地を代表する集落遺跡の一つです。これらの整理が進めば、縄文人の暮らしぶりや集落のようすが、その移り変わりが再現されることでしょう。

5) 縄文時代後期(約 4000 年～3000 年前)

気候は引き続き寒冷化が進み、列島の海岸線や自生する植物(植物相)や生息する動物(動物相)が、現在とほぼ同じになったと考えられています。遺跡のようすも中期後半からの状況が続き、集落が分散し小規模化していったと考えられます。後半になると、遺跡は大半が沖積地に立地するようになり、続く晩期にかけて大規模な墓地も営まれるようになります。世界遺産を構成する遺跡、鹿角市の大湯環状列石や北秋田市の伊勢堂岱遺跡は、周辺集落の共同墓地であるとともに、集団でお祭りや儀式を行う場であったと考えられています。

東北地方の土器は、当初は中期の様式を継承しつつも、多様化の傾向もみられます。その後、文様の構成が縦方向から横方向の区画へと変化し、文様を施さない無文の深鉢形土器もみられます。やがて後半になると、粘土で小さい突起を貼り付けた瘤付土器が作られ、入組文と呼ばれる独特のデザインが主流となり、晩期へとつながっていきます。

横手盆地では 57 遺跡と確認数が少なく、遺跡のようすはよく分かっていませんが、

はじめのうちは中期からの集落が営まれているようです。増田地区の八木遺跡も中期から続く小規模な集落跡ですが、後期になると墓地が営まれるようになります。そして、後期の終わりごろになると、横手地区のオホン清水遺跡群などのように、沖積地や古い段丘面で晩期まで続く墓地が営まれる遺跡が増えてきます。

大鳥井山遺跡では、小吉山の台地で中期からの集落が続いていますが、掘立柱建物跡やお墓はまだ確認できていません。この集落は前半で途絶え、以降、平安時代になるまで遺構は見つかっていません。

6) 縄文時代晩期(約 3000 年前～2400 年前)

気候は晩期から弥生時代の初めにかけて何度かの寒冷化があり、砂浜や沖積地の拡大といった環境変化があったと考えられています。遺跡の立地は、これまでの沖積地に加え、一段低い沖積低地に掘立柱建物が中心の集落を営んだ遺跡もみつかっています。

東北では、薄手の精巧な亀ヶ岡式土器(大洞式土器)が作られます。その影響は北海道から九州北部に及び、各地の遺跡で亀ヶ岡式土器や類似した土器が見つかっています。

土器は、深鉢形土器・浅鉢形土器・壺形土器・注口形土器・香炉形土器などの多様な器形に、入組文・三叉文・雲形文・磨消縄文といったさまざまなデザインや手法が施されています。同じ手法で土製品も作られますが、なかでも代表的な遺物は遮光器土偶でしょう。

土器の様相は、数段階の変遷を経て、工字文・沈線などの簡潔で幾何学的なデザインに収斂(しゅうれん)していき、その系譜は弥生時代へ引き継がれていきます。なお、東北で亀ヶ岡式土器が作られていた晩期の後半ころ、西日本では弥生土器が作られ、稲作が始まっていたと考えられています。

横手盆地では 127 遺跡と、縄文時代の中で最も多くの遺跡が確認されています。沖積地の微高地に立地し、古代の集落跡との複合遺跡が大半を占めます。なかでも特徴的なのは、山内地区の虫内遺跡群、増田地区の梨ノ木塚遺跡や平鹿遺跡など、数百基のお墓がある広大な墓地が営まれる遺跡が多いことです。これに対し、竪穴住居跡が 34 軒見つけた宮下遺跡や 15 軒のオホン清水遺跡群はあるものの、集落のようすはまだよくわかりません。多くは後期からの分散化で点在する小規模な集落で、そこに住む人たちが共同で墓地を造営し、祭祀もおこなっていたものと考えられます。

大鳥井山遺跡では遺構は確認されていませんが、整理が進めば遺物が見つかる可能性はあります。

5. 弥生時代(約 2400 年前～1800 年前・紀元 3 世紀ころ)

稲作農耕文化や青銅器・鉄器に代表される弥生時代ですが、東北地方では青森県や宮城県などで水田遺構が見つかっています。秋田県内では、確実な弥生時代の水田遺構は見つかっていませんが、秋田市の地蔵田遺跡は大形の竪穴住居跡もある大きな集落跡で、集団で稲作を行っていた可能性が考えられています。

西日本では薄手で硬い弥生土器が作られますが、東北地方では縄文土器の様式や技法を受け継いだ土器が作られています。さらに北海道では、縄文時代に連続する続縄文時代が次の古墳時代まで続きます。

横手盆地では 32 遺跡と大幅に減り、大半は弥生時代中ごろ以降の遺跡で、発掘調査された遺跡も、遺構が見つかった遺跡も少ない状況です。現在は横手西インターチェン

シとなっている手取清水遺跡では、周辺に水田跡が見つかる可能性があります。石鏃も出土しており、縄文時代以来の狩猟採集も続いていたものと考えられます。また、雄物川地区の廻館Ⅰ遺跡の赤く塗られた壺は、中部地方の土器の特徴があり、北陸経由で運ばれてきた可能性が考えられています。

大鳥井山遺跡では、弥生時代中ごろの鉢形土器の破片 1 点が見つかっています。

1 万年以上前から、大鳥井山遺跡の移り変わりを観てきましたが、人びとが生活を営んだ痕跡は、縄文時代後期前半でいったん途切れます。

時を経て平安時代、清原一族によって、大鳥井山と小吉山の二つの台地を平坦にし、その縁辺に二重の土塁と堀を巡らす大規模な地業が行われました。縄文時代の大鳥井山遺跡は、この土木工事により、一部が消滅したようです。

大鳥井山遺跡は、その後も耕作地開墾や宅地化、公園造成によって一部は消滅し削平も受けていますが、市街地にありながら往時の景観をよく留めている遺跡でもあります。

《主な参考引用文献》

横手市『横手市史 資料編 考古』(2007)

横手市『横手市史 通史編 原始・古代・中世』(2008)

小林達雄 編『総覧 縄文土器』(2008)

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅰ』(1978)

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅱ』(1979)

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅲ』(1980)

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅳ』(1981)

横手市教育委員会『大鳥井山Ⅴ』(1982)

横手市教育委員会「大鳥井山遺跡第 6 次発掘調査現地説明会資料」(1982)

横手市教育委員会「大鳥井山遺跡第 7 次発掘調査現地説明会資料」(1983)

横手市教育委員会『金沢城跡第 6 次・沼館城跡第 2 次・大鳥井柵跡第 8 次 調査概報』(2008) 横手市文化財調査報告第 9 集

横手市教育委員会『大鳥井山遺跡―第 9 次・第 10 次・第 11 次調査―』(2009) 横手市文化財調査報告第 12 集

縄文土器様式編年表 (抄)

『総覧 縄文土器』(2008)より

北部		陸北部		中部		関東		東北部		北海道		時期区分	年代 (calBC)	
南部		西部	東部	西部	東部	南部	北部	道南	道央	道東・北				
出現期土器群												草創期	13000	
隆起線文系													12000	
瓜形文系 / 円孔文系													11000	
多縄文系												10000		
押型文系 大川 神宮寺	尖底回転縄文系			撚糸文系			早期無文					早期	9000	
	押型文系 黄島	押型文系 沢・樋沢 細久保			貝殻・沈線文系			押型文系 日計					8000	
		貝殻・沈線文系						高山寺 穂谷			貝殻・沈線文系 平底			
糸痕文系												6000		
縄文糸痕文系												前 期	5000	
佐波 極楽寺	縄文糸痕文系 (格状正痕文系)		東海糸痕文系 / (絡糸体正痕文系)			縄文糸痕文系		縄文系平底						
北白川下層	布目新谷		塩屋 木島 中越		塚田 中道 神ノ木		羽状縄文系					中 期	4000	
	有尾		有尾		前期大木									
縄文条痕文系												後 期	2000	
糸痕文系平底														
宗仁												前 期	5000	
縄文系平底														
表館 早稲田6類												後 期	2000	
縄文条痕文系														
円筒下層												後 期	1000	
円筒上層														
陸奥大木系												後 期	1000	
北筒														
網取・南境												後 期	1000	
手稲														
宝ヶ峯												後 期	1000	
壺付														
東三川Ⅰ・上ノ国												後 期	1000	
幣舞														
浮線網状文系												縄 文 時 代 以 降	1000	
(弥生土器)														
(土器器・須恵器)												縄 文 時 代 以 降	1000	
(擦文時代) (オホーツク)														

- 縄文土器の各様式の編年の位置と空間的なひろがりやを矩形的枠で模式的に示した。実際の上器群には分布の伸縮など矩形で表現できない動態がある。
- 様式の区分は、今後の研究の進展によって細別あるいは大別など、補正されるべきものである。作成にあたっては本書掲載の様式各説を基礎としたが、執筆の間での見解の相違や説明のない部分については編集者が補った。
- 前後の様式の関係、隣接する様式間にはさまざまな様態があり、折衷が起こるような親縁な関係からほとんど没交渉の疎遠な関係まで、一律的な区分線では表現できない問題がある。親縁な相互関係を \longleftrightarrow 、方向性の明確な影響関係を \rightarrow で表現した。
- 推定される各時期の年代を右欄に示した。谷口康浩2001「縄文時代遺跡の年代」および本書掲載の小林謙一「縄文土器の年代(東日本)」で示された関東地方の年代値を主に参照し、放射性炭素年代測定値から校正された暦年代(calBC)で表した。
- 年代欄に \blacktriangleleft マークで示した9時期にかかる様式の分布図を作成した。
- 本表の作成にあたり次の各氏のご教示を得た。安孫子昭二・泉 拓良・石井 寛・伊藤慎二・榎本剛治・大沼忠春・小熊博史・金子直行・熊谷常正・相見伊久雄・千葉 豊・永瀬史人・菅田 明・増子康真・水ノ江和同・矢野健一(敬称略)

(小林達雄・谷口康浩・中村耕作・石井 匠)

【資料紹介】

Ⅳ 大鳥井山遺跡の出土遺物が物語る広域交流

大鳥井山遺跡では、横手盆地よりも南の流儀で作られた土器や北の流儀も採り入れて作られた土器、原産地が限られる石材の石器などが出土しています。どのような経路や経緯で持ち込まれたかは不明ですが、土器文化圏を越えて人びとや文化の交流があったことを物語ってくれます。

【天然アスファルト】 石鏃の根元など、接着剤として使われたアスファルトの付着した遺物は秋田県内でも多くの遺跡から出土しますが、産地は潟上市槻木地区と能代市駒形地区に限られます。大鳥井山遺跡では、アスファルトが付着した石器のほか、びっしりとアスファルトの入ったミニチュア土器も出土しました。

【黒曜石】 石鏃は弓矢の先となる(矢じり)小さい石器で、出土した 90 点余りのなかで、7 点が黒曜石製でした。ほかに、加工の際に剥がれた細かい滓片 14 点も出土しています。黒曜石は、ガラス質で黒く透明感があり、脆さはあるものの打ち欠いたときの断面は鋭利で、列島全域で旧石器時代から良質な石材として流通し使われていました。原産地は全国 70 箇所ほど、秋田県内では男鹿半島のほか、田沢湖周辺が知られています。

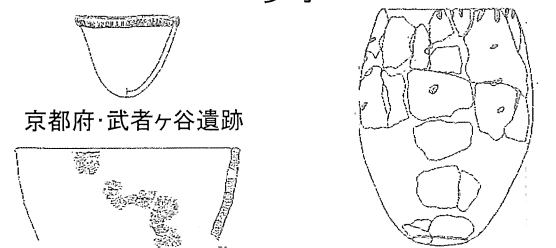
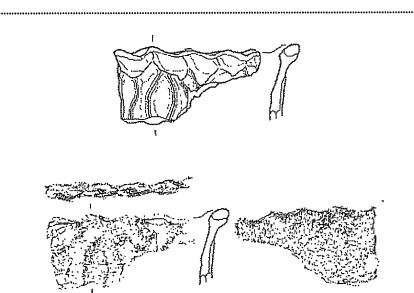
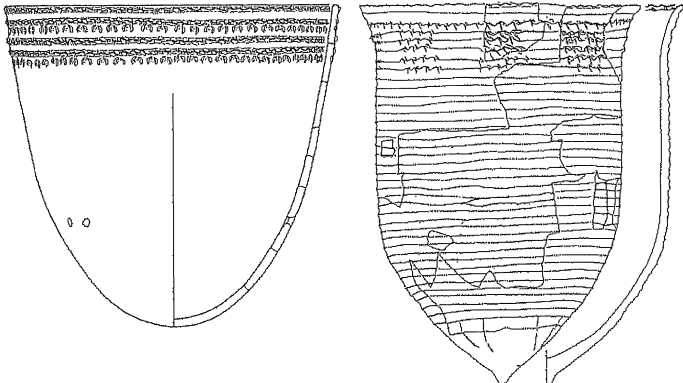
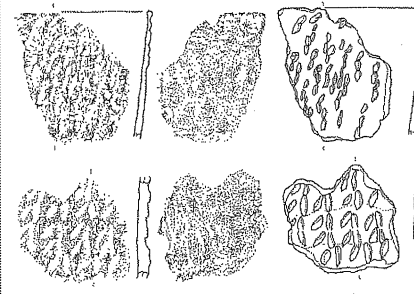
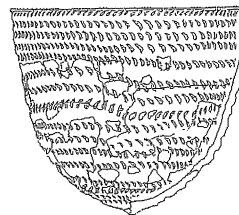
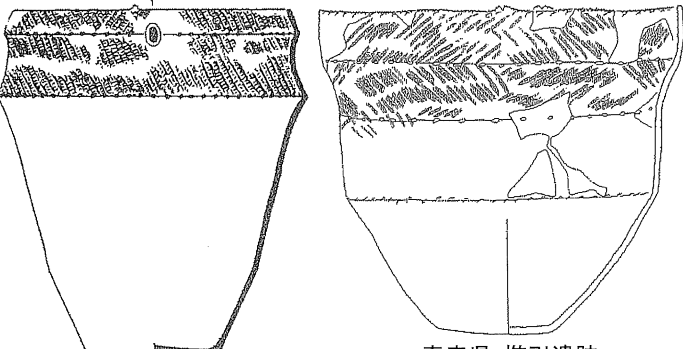
【透閃石岩(とうせんせきがん)、青虎石(あおとらいし:緑色岩)】 磨製石斧は、柄に装着して斧、あるいは手斧(ちょうな)や鑿(のみ)などとして機能した石器で、60 点余り出土し、欠損していないのは 1 割ほどです。また、欠けた刃先を再生し、再利用したものもみられます。このなかで、北陸地方原産の透閃石岩製と北海道日高地方原産の青虎石(緑色岩)製のものがそれぞれ 1 点ずつ出土しています。透閃石岩製は欠けて根元部分だけですが、青虎石製は欠けた刃部を作り直しており、再生後は未使用で埋納されています。

遺物				
	アスファルト入り ミニチュア土器	石鏃(矢じり) 剥片(石くず)	磨製石斧	(埋納石器) 磨製石斧
石材等	天然アスファルト	黒曜石	透閃石岩	青虎石 (緑色岩)
産地	潟上市槻木 など	男鹿半島など	新潟県 糸魚川	北海道 日高地方

V 横手盆地の遺跡から出土した縄文土器の移り変わり


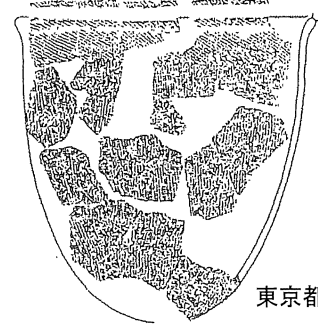
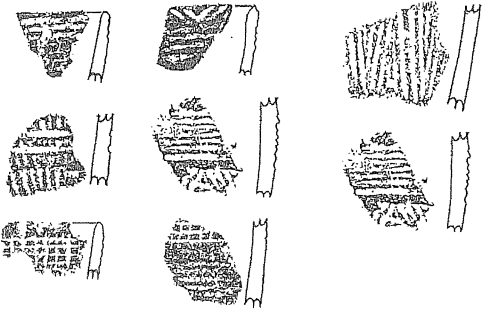
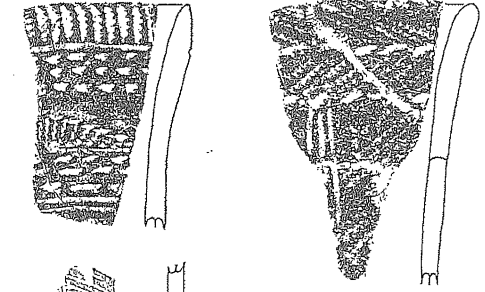
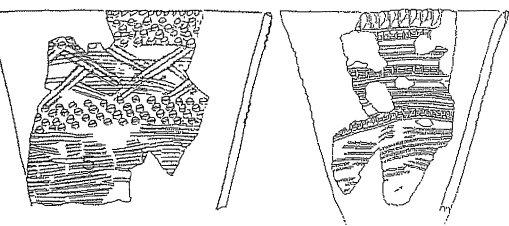


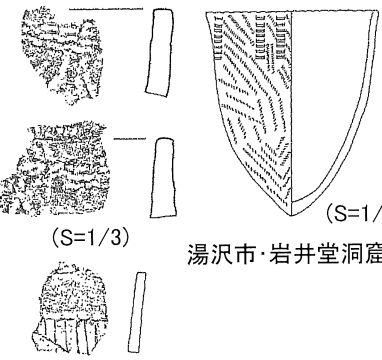
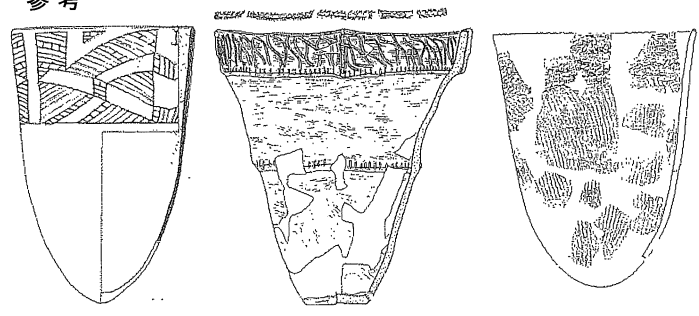
『横手市史 通史編 原始・古代・中世』(2008), 『横手市史 資料編 考古』(2007)をもとにした土器編年

草創期(約1万3000年前～1万年前)

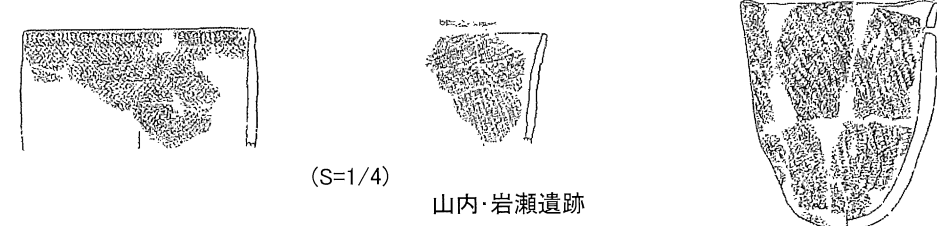
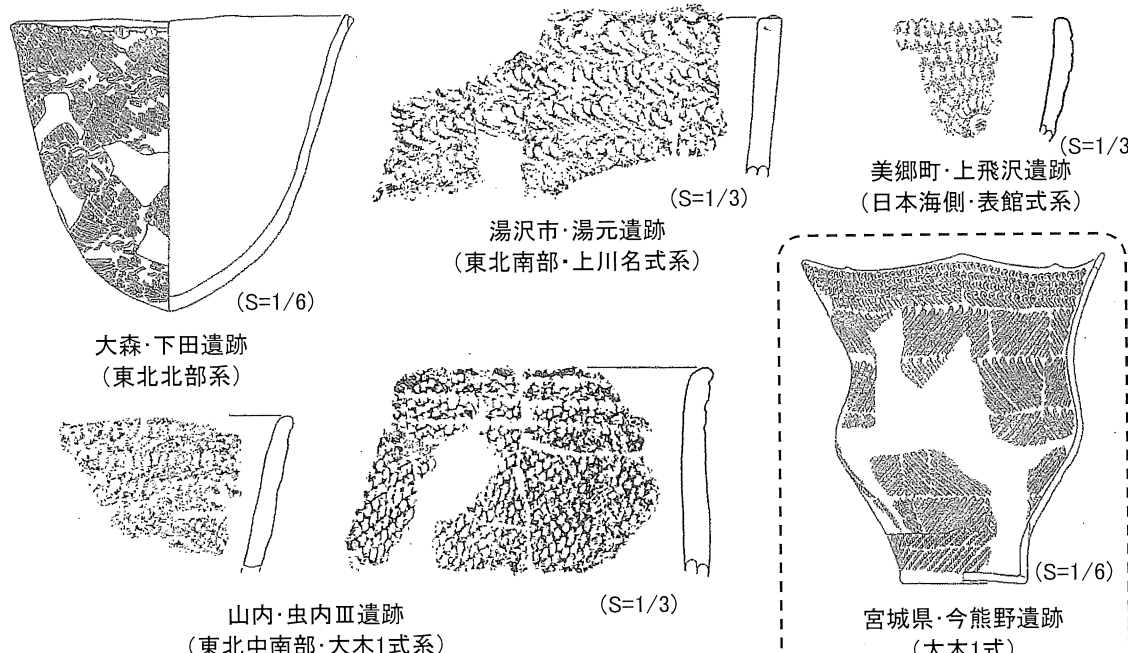
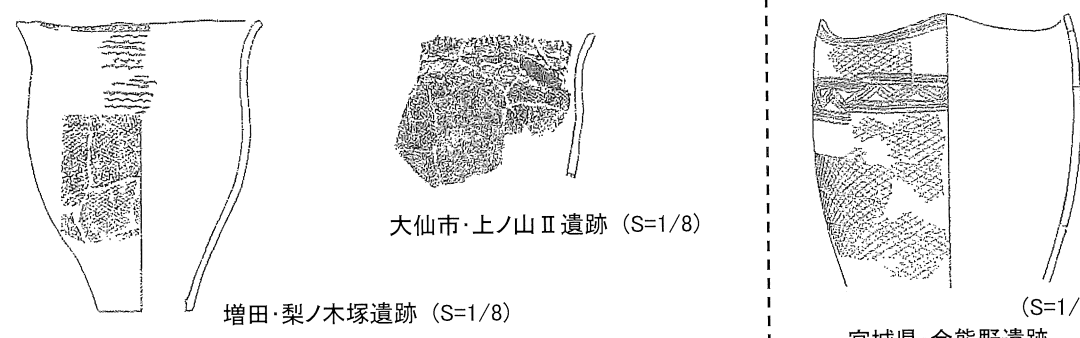
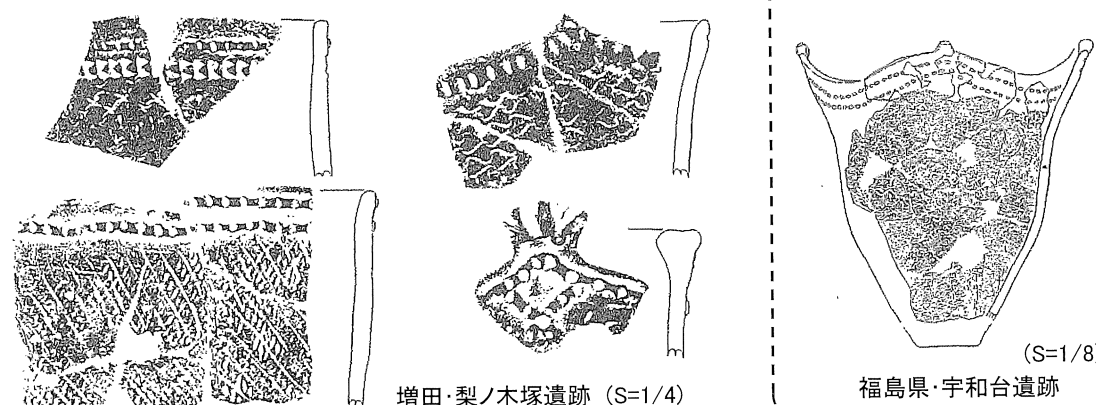
<p>出現期土器群</p>		<p>参考</p>  <p>京都府・武者ヶ谷遺跡</p> <p>東京都・前田高地遺跡</p> <p>長崎県・泉福寺洞穴</p> <p>『総覧 縄文土器』(2008)より</p>
<p>隆起線文土器群</p>		 <p>神奈川県・花見山遺跡</p> <p>青森県・表館 I 遺跡</p>
<p>爪形文系土器群</p>	 <p>山内・岩瀬遺跡 (S=1/3)</p>	 <p>岩手県・大新町遺跡</p> <div data-bbox="1077 1400 1412 1556" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>参考：横手盆地では全体の器形が分かる資料がないため、盆地外の遺跡出土資料を掲載した。</p> </div>
<p>多縄文系土器群</p>		 <p>新潟県・室谷洞窟</p> <p>青森県・楡引遺跡 (S=1/6)</p>

* 大鳥井山遺跡出土の縄文土器は、『横手市史』では「資料編」「通史編」とも小吉山遺跡として扱っており、ここではそれに従った。

早期(約1万年前~6000年前)

前葉	燃系文系土器群	 <p>山内・岩瀬遺跡 (S=1/6)</p>	 <p>東京都・多門寺前遺跡 (S=1/6)</p>
	押型文系土器		
中葉	貝殻沈線文系土器群・貝殻文系土器群	 <p>湯沢市・岩井堂洞窟 (S=1/3)</p>	 <p>岩手県・大新町遺跡 (S=1/8)</p> <p>岩手県・西黒石野遺跡 (S=1/8)</p>
		 <p>山内・岩瀬遺跡 (S=1/6)</p>  <p>湯沢市・岩井堂洞窟 (S=1/6)</p>	
後葉	縄文条痕文土器群	 <p>(S=1/3)</p> <p>湯沢市・岩井堂洞窟 (S=1/6)</p> <p>大仙市・新田表Ⅱ遺跡 (S=1/3)</p>	<p>参考</p>  <p>福島県・竹之内遺跡 (S=1/8)</p> <p>福島県・中ノ沢A遺跡 (S=1/10)</p> <p>福島県・源平C遺跡 (S=1/10)</p>

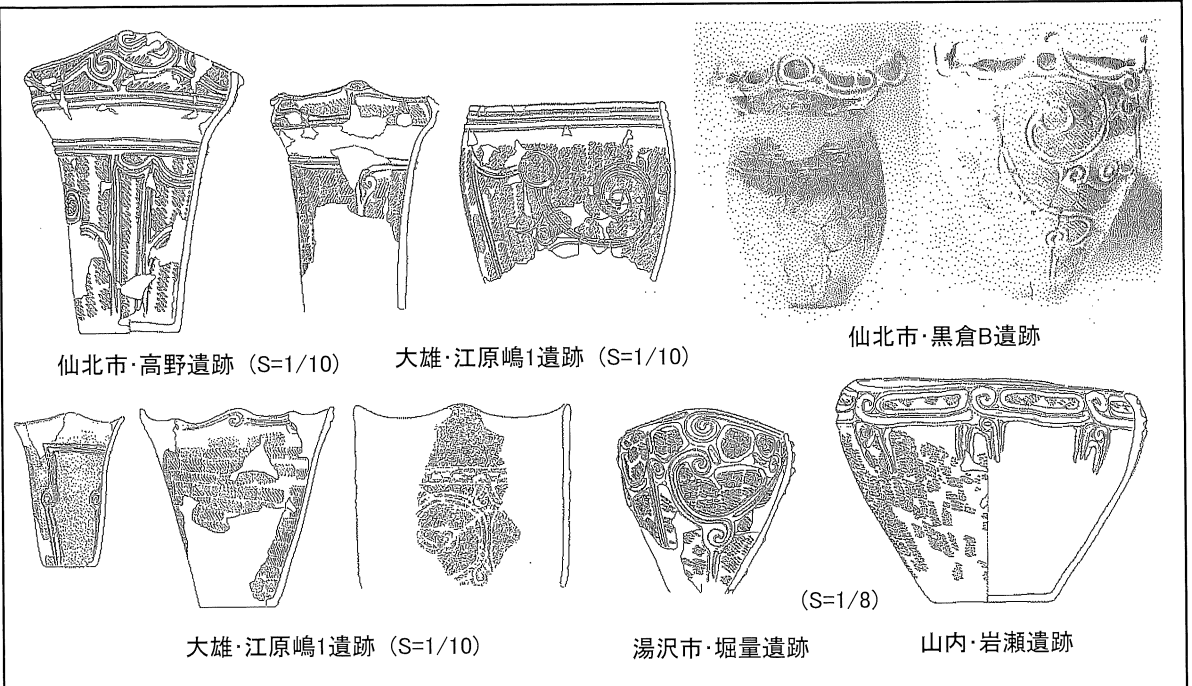
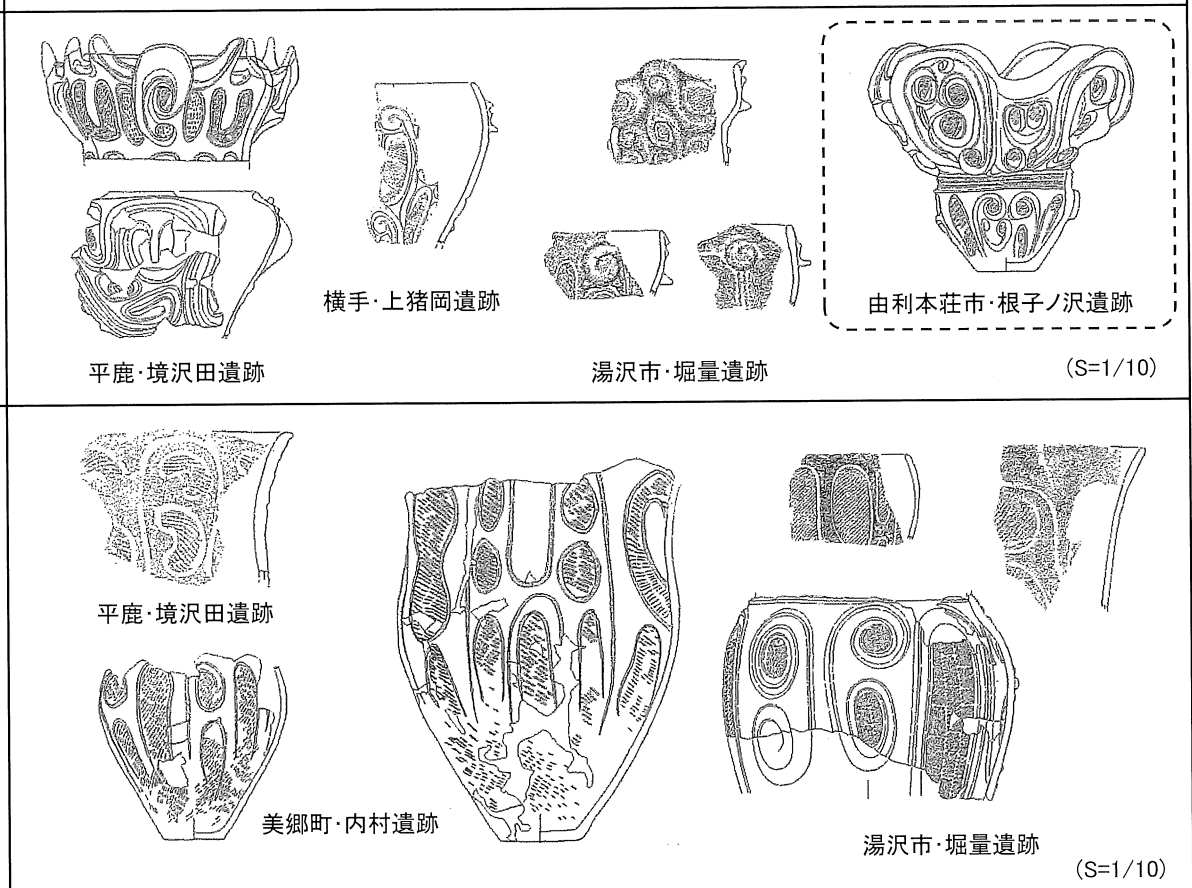
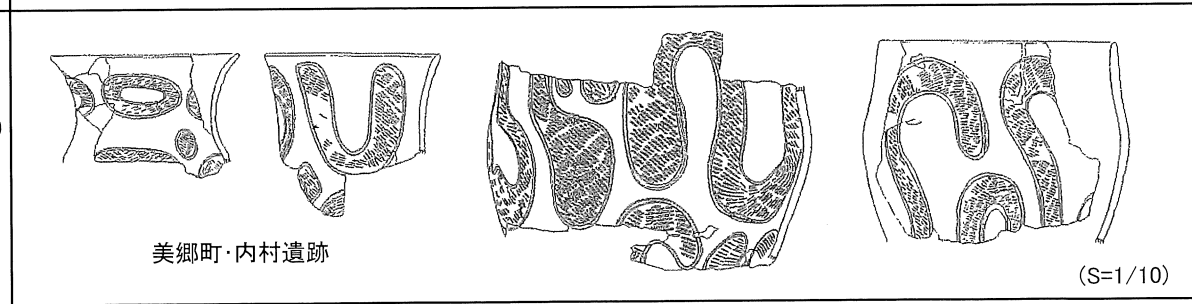

前期(約6000年前~5000年前)

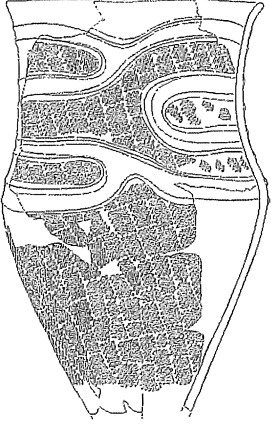
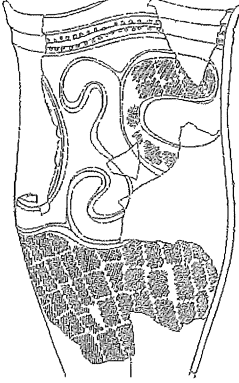
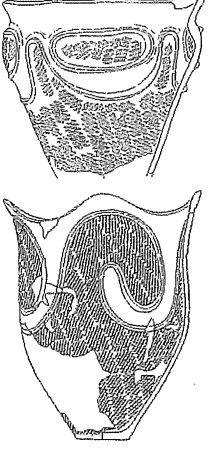
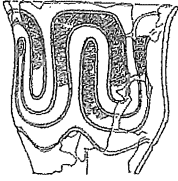

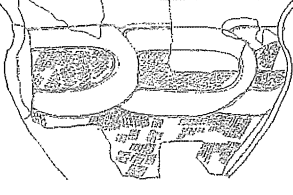


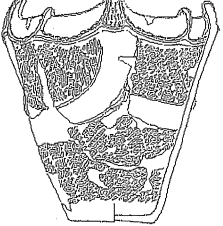
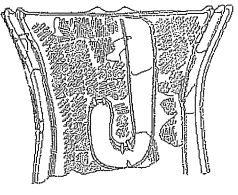
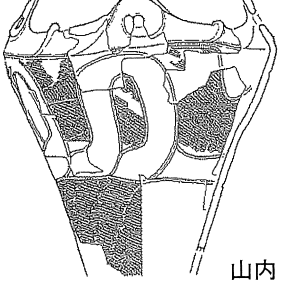

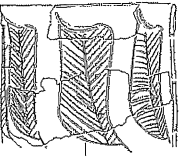
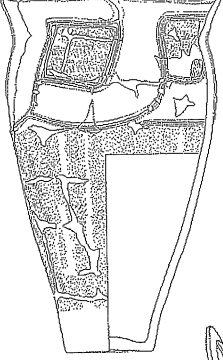
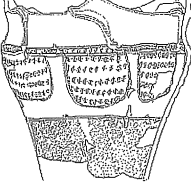
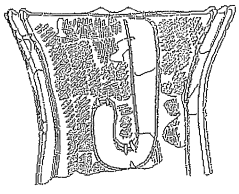
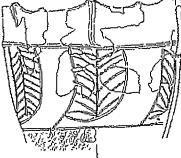

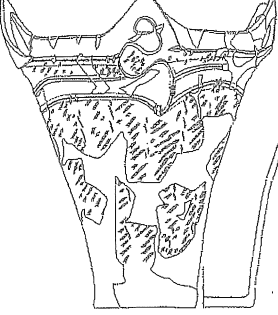
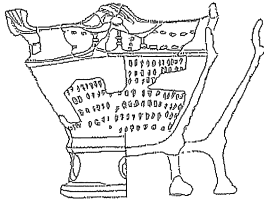
<p>初頭</p>	<p>上川名式</p>	 <p>(S=1/4) 山内・岩瀬遺跡</p> <p>(S=1/6)</p>
<p>前葉</p>	<p>大木1式・東北北部系など</p>	 <p>(S=1/6) 大森・下田遺跡 (東北北部系)</p> <p>(S=1/3) 湯沢市・湯元遺跡 (東北南部・上川名式系)</p> <p>(S=1/3) 美郷町・上飛沢遺跡 (日本海側・表館式系)</p> <p>(S=1/3) 山内・虫内皿遺跡 (東北中南部・大木1式系)</p> <p>(S=1/6) 宮城県・今熊野遺跡 (大木1式)</p>
<p>中</p>	<p>大木2a式</p>	 <p>(S=1/8) 大仙市・上ノ山Ⅱ遺跡</p> <p>(S=1/8) 増田・梨ノ木塚遺跡</p> <p>(S=1/8) 宮城県・今熊野遺跡</p>
<p>葉</p>	<p>大木2b式</p>	 <p>(S=1/4) 増田・梨ノ木塚遺跡</p> <p>(S=1/8) 福島県・宇和台遺跡</p>

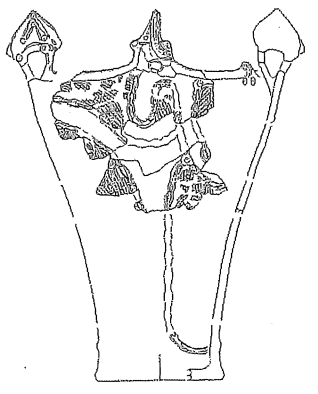
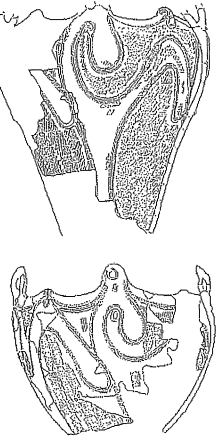
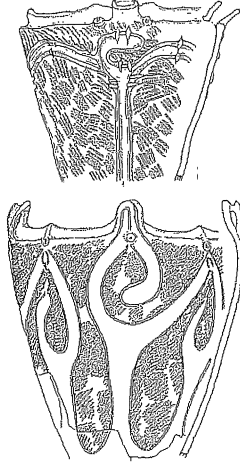

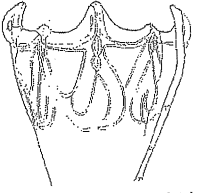
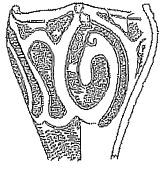


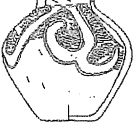
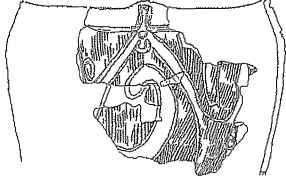
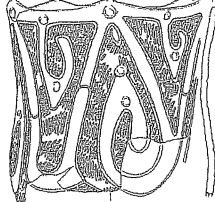
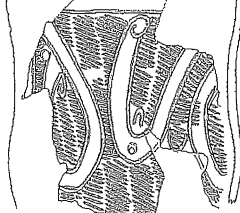
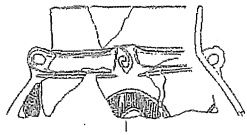
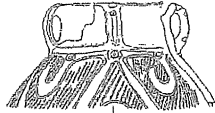
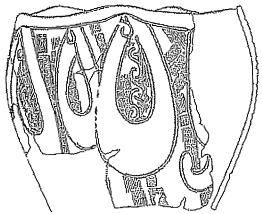
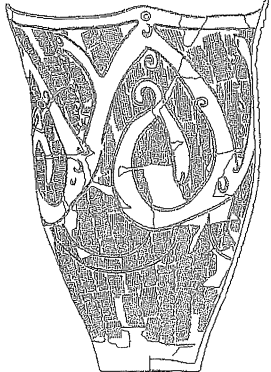
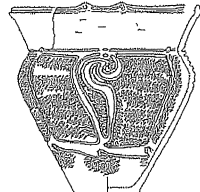

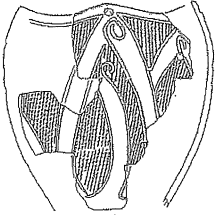
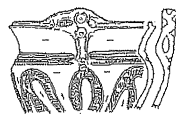

<p>前 期 中 葉</p>	<p>大木3式</p>	<p>大雄・江原嶋I遺跡 (S=1/4)</p> <p>増田・梨ノ木塚遺跡</p> <p>宮城県・六田遺跡 (S=1/8)</p>
<p>後 葉</p>	<p>大木4式</p>	<p>横手・小吉山遺跡 (S=1/4)</p> <p>増田・梨ノ木塚遺跡 (S=1/8)</p> <p>山内・小田V遺跡 (S=1/6)</p> <p>大仙市・上ノ山II遺跡 (S=1/8)</p>
<p>大木5式</p>	<p>大木5式</p>	<p>大仙市・上ノ山II遺跡 (S=1/8)</p>
<p>末 葉</p>	<p>大木6式</p>	<p>雄物川・根羽子沢遺跡 (S=1/8)</p> <p>(文様に東北北部・円筒下層d式の影響)</p>

中期(約5000年前~4000年前)

<p>初頭</p>	<p>大木7a式</p>	
<p>前葉</p>	<p>大木7b式</p>	
<p>中葉</p>	<p>大木8a式</p>	

<p>中 期 中 葉</p>	<p>大木 8b 式</p>	 <p>仙北市・高野遺跡 (S=1/10) 大雄・江原嶋1遺跡 (S=1/10) 仙北市・黒倉B遺跡</p> <p>大雄・江原嶋1遺跡 (S=1/10) 湯沢市・堀量遺跡 (S=1/8) 山内・岩瀬遺跡</p>
<p>後 葉</p>	<p>大木 9a 式</p>	 <p>平鹿・境沢田遺跡 横手・上猪岡遺跡 湯沢市・堀量遺跡 由利本荘市・根子ノ沢遺跡 (S=1/10)</p>
<p>末 葉</p>	<p>大木 9b 式</p>	 <p>平鹿・境沢田遺跡 美郷町・内村遺跡 湯沢市・堀量遺跡 (S=1/10)</p>
	<p>大木 10 式古段階</p>	 <p>美郷町・内村遺跡 (S=1/10)</p>

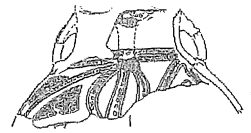
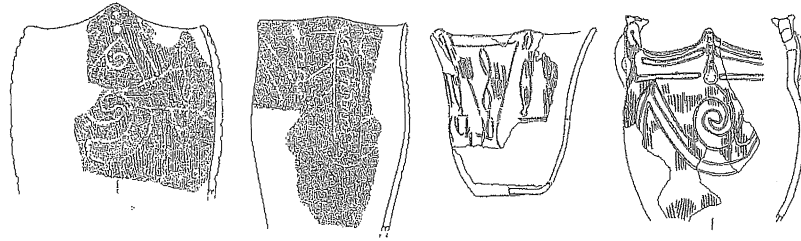
中 期 末	大木10式中段階					大仙市・太田遺跡	
			湯沢市・堀量遺跡				
葉	大木10式新段階					美郷町・中屋敷Ⅱ遺跡	
		湯沢市・堀量遺跡					
後期(約4000年前~3200年前)							
初 頭	東北地方の土器群 (大木系・門前式など)					増田・八木遺跡	
		仙北市・高野遺跡	大雄・江原嶋1遺跡	山内・越上遺跡			
						大雄・江原嶋1遺跡	
		大仙市・太田遺跡				山内・上谷地遺跡	
						(北陸・三十稲場式系)	
		湯沢市・長戸呂遺跡		(東北中部系)			

後 期 初 頭	東北地方の土器群	 <p>大仙市・上野台遺跡</p>	 <p>大雄・江原嶋1遺跡</p>	 <p>増田・八木遺跡</p>	<p>(異系統)</p>  <p>横手・小吉山遺跡</p>	
	前 葉	第一段階	  <p>大仙市・下田谷地遺 増田・八木遺跡</p>			
		 <p>山内・小田V遺跡</p>		 <p>増田・八木遺跡</p>	 	
		 <p>大雄・江原嶋1遺跡</p>	 <p>大雄・江原嶋1遺跡</p>			
		 <p>増田・八木遺跡</p>			 <p>増田・八木遺跡</p>	 <p>大雄・江原嶋1遺跡</p>

(S-1/10)

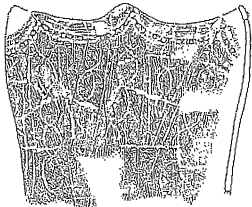
第二段階 (宮戸Ib式)

後
期
前
葉

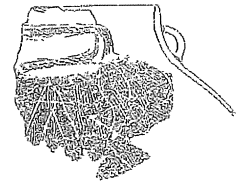


増田・八木遺跡

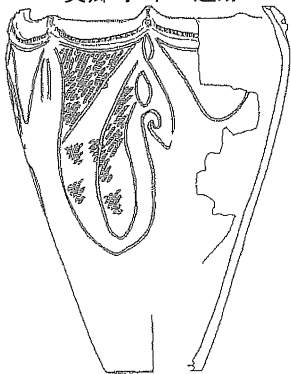
大仙市・茨野遺跡



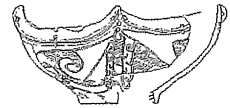
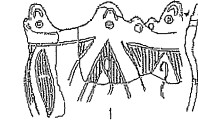
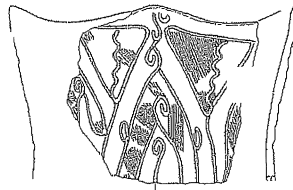
美郷町・十二遺跡



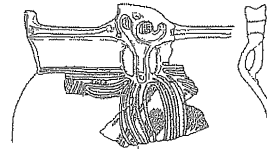
横手・小吉山遺跡



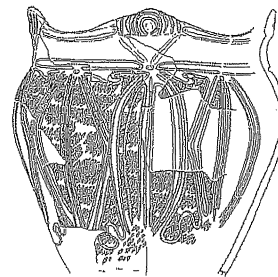
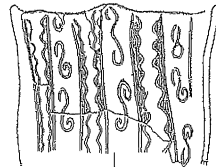
増田・八木遺跡



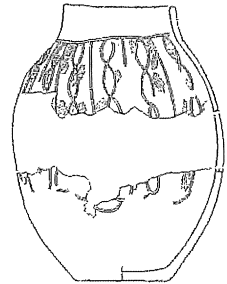
増田・八木遺跡



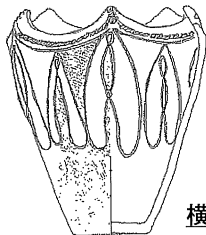
大雄・江原嶋1遺跡



増田・八木遺跡

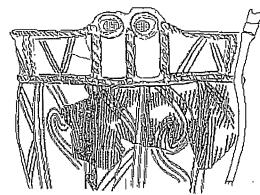


大仙市・茨野遺跡

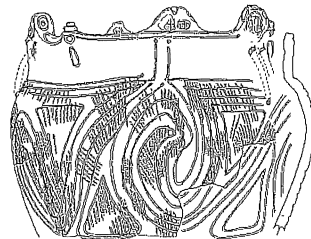
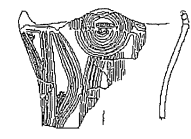
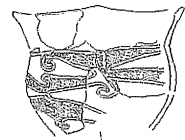
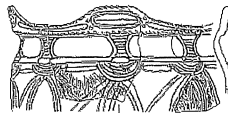
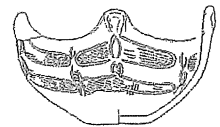


横手・小吉山遺跡

第三段階



美郷町・十二遺跡



大雄・江原嶋1遺跡

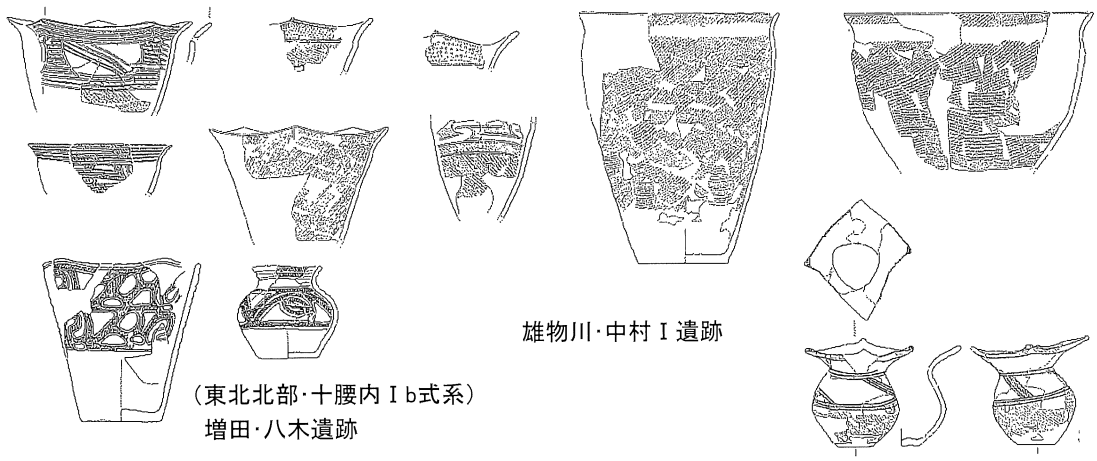


増田・八木遺跡

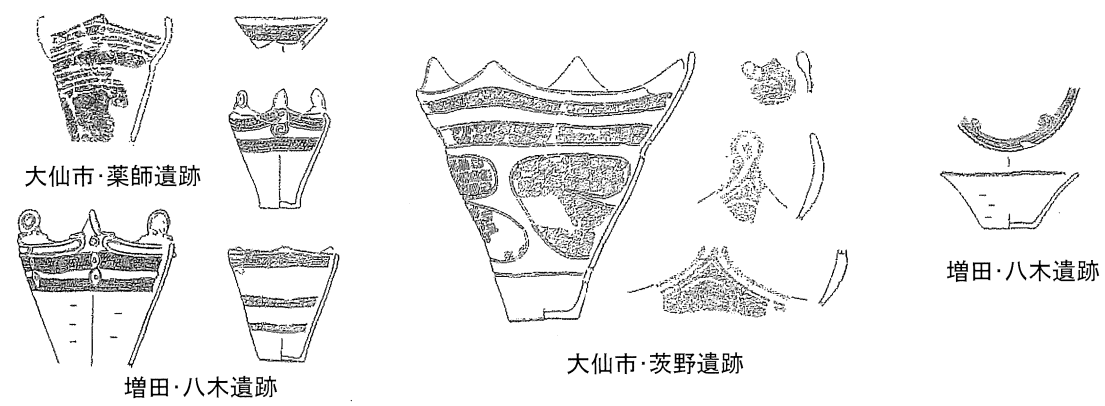
増田・八木遺跡

後
期
前
葉

過渡期の土器群

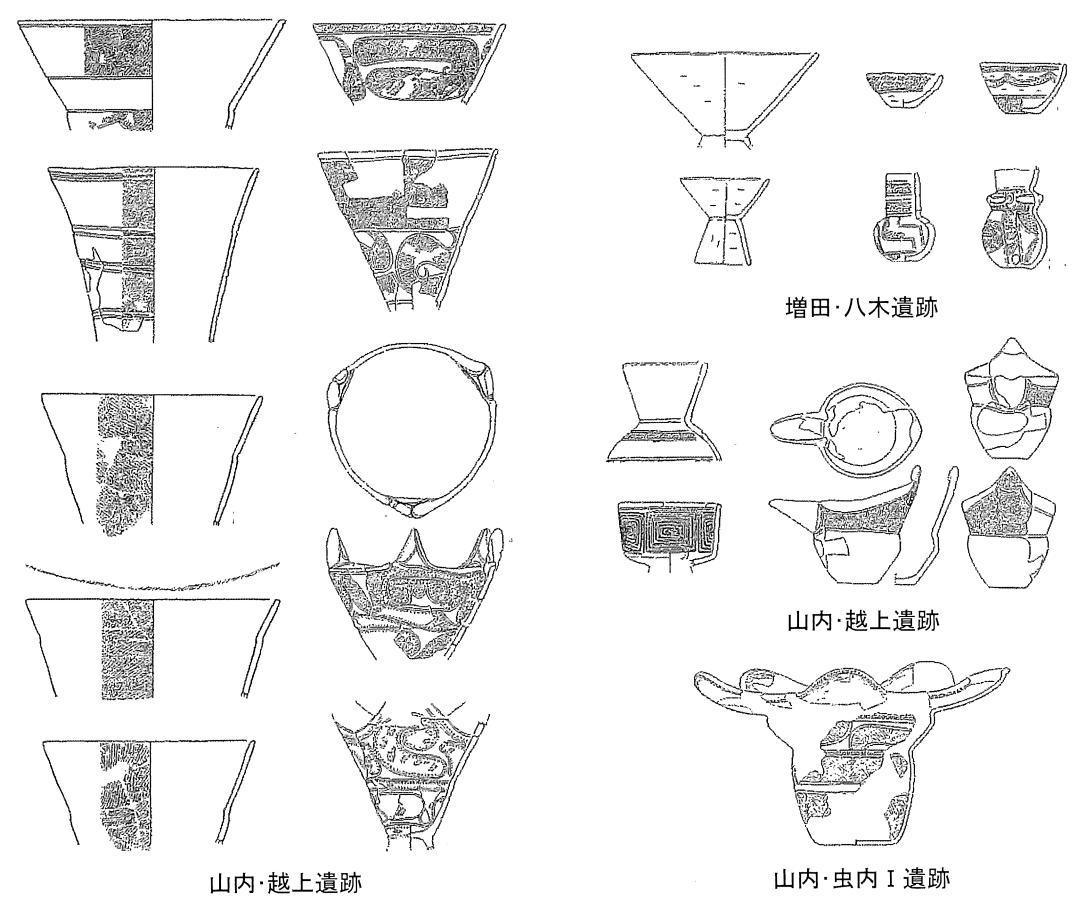


前半段階
(宝ヶ峰式など)



中
葉

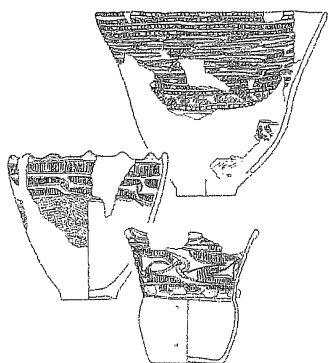
後半段階



晩期(約3200年前~2400年前)

後
期
後
葉

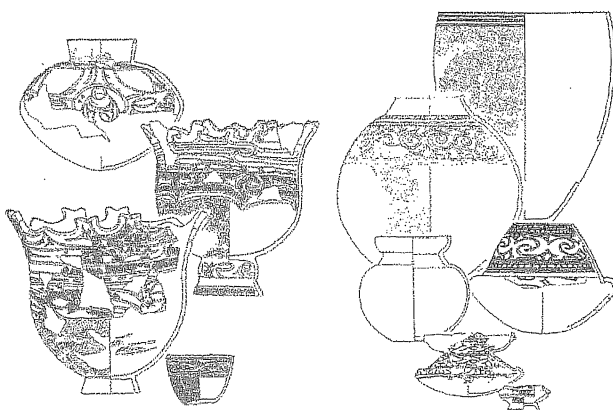
瘤付土器



山内・虫内 I 遺跡

前
葉

大洞B式・大洞BC式

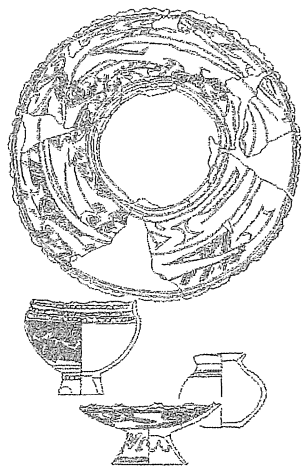


(大洞B式)
山内・虫内 I 遺跡

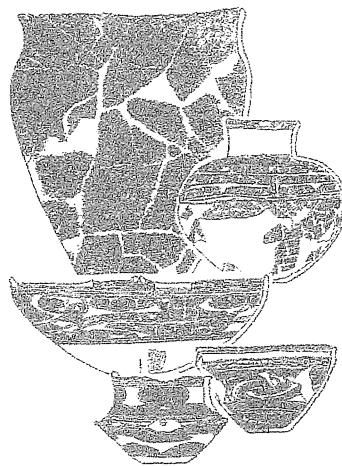
(大洞BC式)
横手・オホン清水A遺跡

中
葉

大洞C1式・大洞C2式



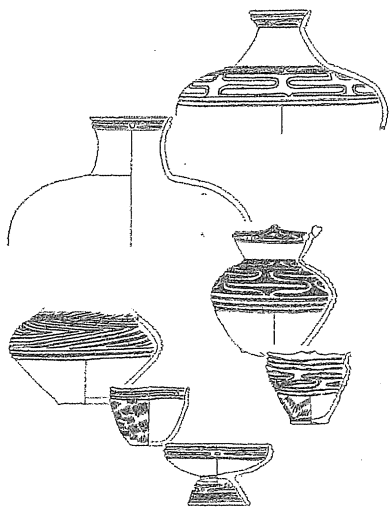
(大洞C1式)
平鹿・兵部ヶ沢遺跡



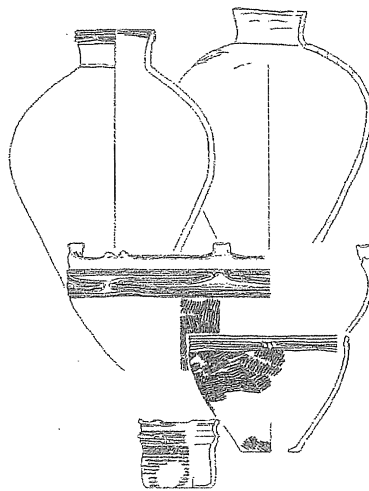
(大洞C2式)
横手・前通遺跡

後
葉

大洞A式・大洞A'式



(大洞A式)
増田・平鹿遺跡



(大洞A'式)
増田・梨ノ木塚遺跡